Okinawa Prefectural University of Arts

奄美とその周辺地域における神名について

——文献を中心に——

照屋　　理

序　——南島における神名研究について——

南島地域における神名は、どのように研究されてきたのか、先行研究を通してみてみる。研究の端緒となっているのは「沖縄学の父」と称される伊波普猷である[1]。伊波は折口の「万葉集講義」を引いて「これは琉球人の場合にも、よくあてはまる。(中略) だから、代々の女君には、育ての親がつけた童名の外に、神のみが呼び得る神名なるものがあつた筈だ」[2]と神名に注目し、研究を行っている。「つきしろ考」「きみよし考」「火の神考」などでは、主に『おもろさうし』および『久米仲里旧記』収載の神歌を基にした神名研究がなされた。伊波はまた、「琉球人の祖先に就いて」や「琉球の神話」等で、たとえば『おもろさうし』巻10－2 (512) を挙げ、そこに登場する「あまみきよ」「しねりきよ」について「琉球開闢の神アマミキヨの名は琉球人の祖先が九州から来て、奄美大島を経て琉球に来たことを証明する手がかりになる」とし、「口碑によれば、アマミキヨは、はじめ海見嶽に天降して大島を経営したが、暫らくの後、南の方へ行つたといふ」と、神歌のみならず、神話・伝説の側面からも神名に言及している。

神歌以外では『琉球国由来記』に収載された神名にも伊波は着目した。「『琉球国由来記』解説」の中で「意義不明のものが多い」としながらも、「これに言語学的解釈を与へ、且つ附帯する伝承に、民俗学的説明を加へることが出来たなら、文献や遺物の欠乏のために、歴史家や考古学者の、探求することを躊躇するやうな、太古の密林に分け入ることが出来るかも知れない」[3]として、いくつかの事例について解釈を試み、その資料的重要性を示している。さらに「あまみや考——大和文化南漸の跡を辿る——」では、『琉球国由来記』に収載された神名と、神歌で得られた成果を総合的に考察し、「南島の高天の原とも云ふべき『あまみや』を冠する嶽名や神名や神女の称号などの分布」、

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

あるいは「五穀の種子を初めて南島に供給したといふ、『かないの君真物』(常世の神)の祭典及び之に因んだ、『あふり』(きぬがさ、涼傘)を冠する嶽名や神名等の分布」が「南漸するにつれて逓減し(中略)てゐる事に示唆を得て(中略)太古以来幾度か南漸した、民族移動の経路を辿る」ことを試みている[4]。

伊波のオモロ研究は、仲原善忠、外間守善、池宮正治、高橋俊三、玉城政美、波照間永吉らが受け継ぎ、同時に神名の研究についても継承され、各人による論文や『おもろさうし辞典・総索引』(初版・第2版)、『沖縄古語大辞典』などの辞典類で、オモロにうたいこまれた神名の語義分析・解釈が進められていった。

オモロ以外の神歌については、久米島の『仲里旧記』の全文翻刻および解釈が、仲原善忠によって初めてなされ、同書に収載された神名の語義分析も行われた。高橋俊三、玉城政美、新里幸昭は仲原の仕事を発展的に継承し、全文翻刻を新たに行って、それをテキストにして解釈を付した総索引を作成している。外間守善、玉城政美、新里幸昭らは『南島歌謡大成』全5巻を編集し、奄美・沖縄・宮古・八重山の歌謡を収集・整理した。この業績によって南島地域に広がる神歌や神名が、かなりの程度把握されることとなった。このうち沖縄本島とその周辺地域の神歌の語彙については、『おもろさうし』や組踊などの語彙とともに『沖縄古語大辞典』に収められ、神名についても分析・解釈が行われている。この他、宮古の神名を網羅的に収載した『平良市史　第9巻　資料編7(御嶽編)』、宮古の神名を分析した新里幸昭の論文、それから八重山の神名に汲み含まれる美意識についての波照間永吉の論文や、八重山の神名の構造を扱った狩俣恵一の論文などがある[5]。

伊波以降の神話・説話の研究について、山下欣一は「南島民間神話研究の歩み」の中で、明治から昭和にかけての時期に、佐喜真興英、岩倉市郎、田畑英勝らの成果があったことを紹介している。そして「一九七〇年代以降になると、南島の民間神話調査研究の様相は一変した」として、福田晃、岩瀬博、遠藤庄治らの名前を挙げ、「諸氏を指導者として、奄美・沖縄、宮古・八重山諸島各地の民間説話の採話作業が、研究会を組織する学生諸君が主力となって精力的に推進され(中略)まさに驚異的な調査活動の維持と、さらに

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

資料の集成、整理と報告書の刊行も実践されている」としている[6]。山下も含む上記の先学たちのこのような成果によって、南島地域の説話およびそこに登場する神とその名称が広く採集され、把握されることとなった。またこれらの成果の中で、神名を特に扱った論文としては、山下の「南島民間神話の周辺――奄美のユタのクチ・聖名・ノロの聖性――」がある。山下は、南島と日本本土の開闢神話を比較し、日本本土の神話にはないが、南島地域の神話には「聖名」についての描写があることに注目し、その性質を明らかにした[7]。

また、波照間永吉は「『琉球国由来記』の説話関連記事（覚書）」（沖縄学研究所紀要）で説話を集め、神名に言及した。そして『琉球国由来記』を含む複数の文献に記録された説話をもとにして、神名と具体的な神の形象との関連を指摘、「沖縄の神々の形象――説話の神と祭祀・芸能の神――」[8]のなかで考察を行っている。

『琉球国由来記』（以下『由来記』）収載の神名についての研究も、伊波以降、継続的に進められていった。鳥越憲三郎・稲村賢敷は、祭祀の場面では神人達だけでなく、集落などをも神名で呼ぶなどの習俗を挙げ、民俗学的な視点を取り入れて、神名のいくつかについて分析を試みている[9]。

『由来記』収載の神名の全体像については、池宮正治・玉城政美による『琉球国由来記収載神名索引』[10]、波照間永吉による「琉球国由来記索引」[11]によって明らかにされた。そしてそれらの神名について、沖縄本島とその周辺、宮古および八重山の３地域でそれぞれ神名表記の形式が異なることを、比嘉政夫が指摘し、分類を行っている。さらに波照間永吉は「琉球国由来記解説」で『由来記』と『由来記』編纂の基礎資料とされる『仲里旧記』を比較し、「『琉球国由来記』に記載された神名は『久米仲里旧記』に記された神名の一部を抽出した」[12]ものであり、その原因として「『琉球国由来記』の編集方針に初めて言及している。玉城伸子は波照間の考察を基に、『由来記』と『仲里旧記』に収められた個々の事例すべてについて比較作業を行い、具体的に裏付けた[13]。

以上が、現在までの南島地域における神名研究のおおまかな流れである。研究対象としては、神歌と『由来記』の神名が対象となっていることが分か

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

る。しかし神歌に関しては、沖縄本島とその周辺地域の神歌が主に研究対象とされ、神名も同様であり、奄美や宮古、八重山を含む全体的な神名研究がなされていない。また、『由来記』については奄美の神名は収載されていないので、従来の『由来記』収載の神名研究においては、奄美関連の神名についてはなされていない。たとえば、伊波が想定した「大和文化南漸の跡」を具体的に見ていくには、残された部分の神名の研究が必要であろう。

また、最近の日本本土の神名研究では、南島の神名との比較研究が行われている。居駒永幸は『古事記』等の神名の持つ「韻律的表現」について指摘し、久米島『仲里旧記』収載の神名がやはり「韻律的表現」[14]によっていることに注目して、その関連性、重要性について言及している。しかし、南島地域全体の神名がそのような傾向を持つかどうかという問題が残されている。

南島の神名が、日本本土の神名とどこまで関連性を持つのか、どのような部分に独自性があるのか。たとえば、日本本土には、語義分析を基本にしながら、歴史学や民俗学、宗教学、比較神話学、自然科学（火山学）など様々な他分野の研究蓄積を交え、神名の解釈を進めていく研究が多く見られる。「政治的・宗教的中央集権化過程を（中略）表現する」ものとして神名を捉えようとする研究[15]や、外来的な神に対して日本土着の神に注目した研究[16]などである。

前者は神名を個別に解釈し、その成果を用い、複数の神名に連関する意味づけを考えたもので、具体的なものとしては、遠山美都男による天皇の神名についての研究がある。遠山は、天皇の神名に含まれる地域名が天皇の代を追う毎に範囲を広げていくことに着目し、天皇の神名は「支配が段階を追って徐々に、だが確実に拡大・浸透していった時間的経過を物語ろうとしたものである」と意味づけた[17]。南島にも王の神号というものがかつてあり、その構成にどの程度異同があるのかということも、上述した課題の一つであろう。

後者としては、益田勝実の研究がある。これは中国から伝来した仏教や儒教などの外来的な神に対して、「日本でしか生まれなかった神々、この列島生えぬきの神々」を神名から明らかにしようとしたもので、特に神名に含まれる風土的要素に注目している。日本に特徴的な風土として、火山に言及し、

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

従来「大地」や「大地の穴」と解釈されてきた「おおなむち」の「な」について、「大きな穴を持つ神、それは噴火口を擁する火山そのものの姿の神格化」[18]を意味するものであるとの、新たな解釈を試みている。

南島には、基本的にいわゆる活火山はないが、火山活動の一環として生成される硫黄がある。そして、その硫黄を司る神もいたのであるが[19]、それらの神々は、どのような神なのか、日本本土を視野に入れた研究がやはり必要であろう。

また、宣長以来進められてきた語義分析を、更に詳細に、厳密に分析していこうとする研究ももちろんある。

複数の神名に共通する要素を「神名の核」として採集・分析し「古代日本人の神観念を明らかに」しようとする研究[20]や、宣長が神名に接尾される神、尊、命などの語の使い分けについて「こは殊なる意にはあるべからず」として切り捨ててしまった問題について、深めようとする研究[21]などである。

これらについても、「古代日本人」とはどの範囲をいうのか、南島の神観念の中に、共通する部分がありはしないか、ということも大きな問題である。つまり、日本本土の神名との比較研究も、南島神名研究をなすための課題なのである。

これらの理由から、沖縄における神名の調査・採集・分析は、なされるべきとの観点から、研究を進めている。本稿は、奄美地域における神名を文献資料から採集・分析し、いくつかの事例について考察を加えたものである。以下、神歌、説話、そしてその他の記録から得られた神名の事例から、特に興味深い事例を紹介し、考察を加えていく。

【注】

1　伊波普猷の師、田島利三郎は、神名について特別に取り上げて研究したことはなかったようである。著書『琉球文学研究』には、そのような考察は見当たらない。また、『おもろさうし』や『宮古島の歌』などの田島による写本を見てみると、収載された神名に注釈をつけている事例もあるが、すべての神名について行っているわけではない。なお、本稿では人物について敬称を略す。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

2　伊波４ 1974:319～321

3　伊波７ 1975:419

4　伊波５ 1974:359~602

5　平良市編さん委員会 1994、新里 2005、波照間 1999、狩俣 1999参照

6　山下 2003:23

7　山下 2003:384～447

8　波照間 2002参照

9　鳥越 1965、稲村1968参照

10　池宮・玉城 1970参照

11　外間・波照間 1997巻末

12　外間・波照間 1997:572

13　玉城 2003参照

14　居駒 2003:23

15　西郷 2005:104

16　益田 1968参照

17　遠山［編］2004:96～98

18　益田 1968:57

19　「21　佐司笠御嶽／22　ヱケドン御嶽／23　若津笠御嶽／24　赤崎御嶽／25　ソデタレ御嶽／26　スヾ御嶽／27　アフリキヨラ御嶽／28　アケシノロ火神／29　アマミノロ火神／硫磺取申ニ付御願所。毎年正月、御祝物トテ米五斗御公儀ヨリ被レ下ケレバ、神酒作リ、右九前ヘ祭奠、ノロ、御タカベ仕、与人・舟筑、朝・八巻、百姓惣様ニテ御拝仕申也。硫磺取申時、佐司笠御嶽・ヱケドン御嶽・若津笠御嶽・赤崎御嶽・ソデタレ御嶽・スヾ御嶽ノ前ニ銭壱貫二百文・今焼マカリ十八枚・焼酎六合。アフリキヨラ御嶽ニ銭弐百文・今焼マカリ三枚・中紙壱帖・焼酎壱合。アケシノロ火神・アマミノロ火神ニ銭四百文・今焼マカリ六枚・針弐十本・中紙三帖・扇子四本・焼酎弐合。毎年、公儀ヨリ受取、居テ、御崇也。」（『由来記』巻十七）

20　土橋 1990参照

21　西川順土 1977参照

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

1　神歌にみる神名

1．事例と総数（『南島歌謡大成Ⅴ奄美篇』）

『南島歌謡大成Ⅴ奄美篇』（以下『奄美篇』）には、神名と考えられる語彙が、延べ355例認められた[1]。語彙の選定は、筆者が行った。その内、同種と考えられる神名をまとめ151種類の用例を抽出した。以下50音順に列挙する。ただし、この神名の数は暫定的なもので、未詳語でも、神名と対語になっている用例は神名とした事例も含まれている。例えば「ちれんとるみきゃみ（チレントル 御神）」の「ちれんとる」について、その語義は今のところ未詳であるが、神名と考えられる「なよくら ぬ おおかみ（ナヨクラ の 大神）」の対語となっており、神名の可能性があると考え、神名の用例として拾った。今後、未詳語の解釈が進めば、そのような未詳語の中から、神名ではないと考えられる事例がでてくる可能性がある。また逆に神名と考えていない未詳語が神名と解釈される可能性ももちろんある。

あしとほぞん
あせのこしらい
あまのきょうたら
あまのたいきょう
あまのなよくら
あまのみずりきょう
あまままきょう
あまみのみやのこしらえきょう
あみのおみおおのかみ
あめんちゃ
あもりさがらし
あやぐらそのかみ
あやまるのかみ
あをなうとぅまち
あをなゆしまち
あをりや上
いしわた
いまよじんすりのかみ
いりきわりがなし
いりたか
うえばらぐじぬす
うがのおおのかみ
うきしばな
うけもちのおおのかみ
うしゃぎみじりこ
うちふくやうやのろ
うちまねぎけむへまねぬうやのろがなし
うなつかな
うんにゃかな
おおあなもちのかみ
おおたのおおのかみ
おおみやひめのおおのかみ

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

おかまはらのかみ
おくた
おしのみりきょう
おまようぜんすり
おもいまつがね
がざぬむぃじりこ
がざのうやのろ
かねのまたらぶぃ
かねふみのかみ
かねまん
きさなけさみ
きしのねーくら
きしゃどん
きしんきしらい
きむくら
きゅうぬくされ
きんぬまたらべー
くさじるきうやのろ
くさりなよくら
くだりはやまる
くだりややまと
くもぬさしかさ
くもぬにょうくも
くもぬましらぶぃ
けさしぬまさどん
けらやねのかみ
さえたかほのかみ
さかみさき
さきへいじのかみ
さすかさ
さよくらぬういぬかみ
さをんさしかさ
さんじろう
しざりきょういぬかみ
しみたまのかみ
しゅだやねーくら
しりやお里森
白金せりきょう
しろこしろまくち
すとうがなし
すりふさ
するのますらべ
せざじりきうのきみ
ぜんすりのかみ
たいのなよくら
たいのみよくら
たきのこしらい
たけふみのかみ
たまぬうやのろ
たまぬおわりきょ
ちきゃはな
ちのさのかみ
ちゅぬぎれさきがなし
ちよかな
ちれんとるみきゃみ
ちれんみるみかみ
つりふさ
つるいりのかみ
てぃーしばな
てぃだのぬきまる

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

てぃんぬないくら
てぃんぬみよくも
てぇぬくされ
てえぬみよくも
てえのくさん
てこのこしらい
てのましらべ
てへんえーきゅらがなし
とばらざきのぶらす
なかき
なかぎりのかみ
なかまのかみ
なぜぬくさずるきうやのろ
なぜぬくされふうかみ
なぜんないくら
なのりのかみ
なよくら
にきくも
にきゃげぇにじりこ
にこのておいくら
のぼりはやまと
のぼりはやまる
はたぬましらぶぃ
はなくら
ひゃんざおやのろ
ふうざとぐじぬす
ふぐらいきょ
ぶじんのかみ
ふたまうやのろ
ふのじがなし
ぶまいる
ふるたか
へいえい
ぼばいろのかみ
ぼろだいいりたかぶれのかみ
まいのぶ
まさりきょさま
まつはでみよ
みけなゆしまち
みこてんのかみ
みぜんすり
みたまのかみ
みてん
みよちよに
むぎゃゆだ
めずらしお森
やうらがん
やたけのくもと
やまくらてーくら
やまぬこーれ
やまのかいらおにー
やまのくまかて
やまんなぜしる
ゆぬかに
よのうちあまてらすおおみかみ
わせやきせんねーくら
わりかね
わんおちま

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

2．神名の分析

神歌から神名を拾い上げる際、方言語形がそのまま記載されている事例、あるいは類推表記がされている事例が多くある。「1．事例と総数」では、そのような355例の神名について、同種別にまとめ直した151例を提示したが、ここでは神名をさらに細かく分析し、複数の神名に共通する語彙要素を求める作業を行う。いくつかの共通語彙について、分析方法・手順を具体的に示しながら考察してみる[2]。

①こしらへ

『奄美篇』収載の神名中「こしらへ」という語を含んでいると考えられる事例には、「あせのこしらい」「あまみのみやのこしらえきょう」「きしんきしらい」「きゅうぬくされ」「たきのこしらい」「たけぬくせい」「たけのくさらい」「てぇぬくされ」「てくぬくしゃれ」「てこのこしらい」「てこのほしらい」「なぜぬくされふうかみ」「やまぬこーれ」がある。

「あまみのみやのこしらえきょう」

オモリ・クチ・タハブェ265「氏神祭〈旧一日・十五日〉の祝詞（徳之島町尾母）」に出てくる事例で、尾母のノロの「ノロ名」（神名）となっている。分析の前に、祝詞の三二節目に挙がっている神名と[3]、この神名の比較をしてみたい。三二節には「あまのみやのくしらえきょうぬ」とあり「尾母のノロの」と、同一のノロ名を表わしていると解釈されている。しかし詞章を較べてみると、一節は「あまみのみや」となっているのに対し、三二節は「あまのみや」と異なっており、混乱していることがうかがえる。『奄美篇』では別資料として、伊仙町の辰浜貞慶氏所有の古文書に収載されているという三五のノロ名を紹介しており、それによると尾母のノロ名は「あまみやこせじつきゃう」[4]となっている。このノロ名は「あま みやこせじつきゃう」と分析できることから、本論では、尾母の神名（ノロ名）は「あまみのみや」ではなく「あまのみや」であると考えておく。

神名を分析してみる（前述したように「あまみのみや」は「あまのみや」としておく）。「あまのみやのこしらえきょう」は、「あま」「の」「みや」「の」「こしらえきょう」とひとまず区切ることができる。

前要素の「あま の みや」は、久米島のオタカベやクェーナ、伊是名島

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

のミセゼル・オタカベ・クェーナに含まれている「天 の みや／あめ の みや（天の庭／あめの庭)」等の事例から、「天（あま）の庭（みや)」[5]と考えられる。

神名の後要素である「こしらえきょう」は、更に細かく分析すると、「こしらえ」「きょう」という区切りを考えることができる。まず「こしらえ」についてであるが、『おもろさうし』に「こしらへ」「こしらゑ」「こしらい」という神名の事例があり、これらの事例と同じ種類の神名と考えられる。上記のオモロ３例では最初の「こしら」は共通しており、語末が「へ」「ゑ」「い」という３種類がある。本事例では「こしらえ」と、「え」いう表記になっているが、実際は「い」と発音されており、表記は類推表記と推測される[6]。それは後に続く「きょう」という語から分かる。「きょう」は接尾敬称辞の「こ」が口蓋化したものと考えられる。「こ」から「きょ」への口蓋化は、前にｉ母音があることが条件としてあるので、「こしらえ」の末尾は、実際には「い」と発音していて、そのｉ母音が「こ」に影響し、「きょ」となったであろうことがうかがえる。ただし、なぜ「きょ」が「きょう」と長くなっているのかは分からない。なお、コシラへに接尾敬称辞がつく事例はオモロやその他の古謡には見られない珍しい神名であり、尾母特有の事例である。

「てぇぬくされ」

古ナガレ歌４「神ぬナガレ（２）（大島龍郷町秋名)」(外間・田畑・亀井 1979 p189) に出てくる事例である。神名はひとまず「てぇ」「ぬ」「くされ」と分析できる。

神名の前要素「てぇ」であるが、他の神名を見てみると「あまみ の みや の こしらえきょう（天の庭のコシラへコ)」「たき の こしらい（嶽のコシラへ)」「たけ の くさらい（嶽のコシラへ)」などのように、神名の前要素には場所を表わす語がくる場合が多いので、「てぇ」も場所を示す語である可能性が高い。「てぇ」は奄美大島や周辺の事例を見てみると、御嶽の意味として神歌に歌いこまれており、上記の事例と同様、ここも御嶽ととらえておいていいだろう。

後要素の「くされ」については、「こしらへ」が語形の変化を経て「くさ

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

れ」となったと考えられる[7]。また、「たき の こしらい(嶽のコシラへ)」「たけ の くさらい (嶽のコシラへ)」などの類似の事例と考え合わせれば、「御嶽＋の＋こしらへ」という構成が、「てぇ」についての分析と一致することが分かる。

【注】

1 『奄美篇』には、オモリ・クチ・タハブェ319首、古ナガレ歌24首、新ナガレ歌45首、イェト43首、八月踊り歌（大島)79首、八月踊り歌（喜界島)26首、八月踊り歌（徳之島)26首、あしび歌（大島)54首、あしび歌（喜界島)20首、あしび歌（徳之島)32首、あしび歌（沖永良部島)30首、あしび歌（与論島)441首、口説18首、芸謡8首、ユングトゥ11首、わらべ歌・言葉遊び68首、手まり歌45首、お手玉歌２首、子守り歌46首、追哺１首の、合計1338首の歌謡が収載されている。本論文では基本的に、ノロやユタ、祭祀儀礼に関わる歌謡を神歌としており、『奄美篇』に収載された歌謡のうち、オモリ・クチ・タハブェ、古ナガレ歌、イェト、八月踊り歌を神歌とした。しかし、傍証や参考の為、すべての歌謡を対象にして調査を行った。

2 神名の分析手順を示す中で、語形の変化を示す際、基本的に音声記号を使用した。ただし、引用や／／で囲んだ記号についてはこれに該当しない。なお、著者が想定した音（現実に存在するか分からない音）については「*」をつけた。また、見出し語については『奄美篇』の事例群などを比較しながら語形変化を考察し、変化の最も少ない語形、つまり祖語あるいは祖語に最も近いと考えられる語形を提示した。

3 オモリ・クチ・タハブェ265「氏神祭〈旧一日・十五日〉の祝詞（徳之島町尾母)

一	尾母	あまみのみやのこしらえきょう	尾母	天宮古志（世）来京
二	亀津	あまのみずりきょう	亀津	天水京
三	亀徳	てこのこしらい	亀徳	てこ の こしらい
四	徳和瀬	あまのねふいくら	徳和瀬	あま の ねふいくら
五	井之川	あまのたいきょう	井之川	あま の たいきょう
六	下久志	あまのなよくら	下久志	あま の なよくら

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

七	花徳	あまのきょうたら	花徳	あま の きょうたら
八	岡前	やたけのくもと	岡前	やたけ の くもと
九	松原	やまのくまかて	松原	やま の くまかて
一〇	与名間	にきくも	与名間	にき くも
十一	山	たきのこしらい	山	たき の こしらい
十二	西阿木名	あせのこしらい	西阿木名	あせ の こしらい
十三	瀬滝	やまのかいらおにー	瀬滝	やま の かいらおにー
十四	大津川	たいのなよくら	大津川	たい の なよくら
十五	兼久	くさりなよくら	兼久	くさり なよくら
十六	阿布木名	白金せり京	阿布木名	白金 せり京
十七	糸木名	しりやお里森	糸木名	しりや お里森
十八	犬田布	めずらしお森	犬田布	めずらし お森
十九	阿権	てこのほしらい	阿権	てこ の ほしらい
二〇	阿山	にこのておいくら	阿山	にこ の ておいくら
二一	伊仙	たいのみよくら	伊仙	たい の みよくら
二二	古里	おしのみり京	古里	おし の みり京
二三	面縄	きしのねーくら	面縄	きし の ねーくら
二四	浅間	あまのたいきょう	浅間	あま の たいきょう
二五	ちいたち	じゅうぐんち	一日	十五日
二六	とぅとぅがなし		祷々加那志	
二七	くまぬ	うぇーしもぬ	ここの	上下の
二八	ちぬかみさま		地の神様	
二九	なあげてうぇーしぇーら		名をいって奉ります	
三〇	みぞごぅさま		御溝川様	
三一	なあげてうぇーしぇーら		名をいって奉ります	
三二	あまのみやのくしらえきょうぬ		尾母のノロの	
三三	しゅでぬしゅーなん	まりたん	袖の下に生まれた	
〈ここで年と名をいう〉———以下略			〈ここで年と名をいう〉———以下略」	

(外間・田畑・亀井 1979：143 頁。傍線・訳の区切りは筆者による。傍線は神名)

＊この祝詞の後に、「二四までは村々の神名を挙げているが、この祝祭の特徴は各村々の『ノロ名』を並べてから祈願の祝詞を読みあげることである」とある。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

4　徳富重成氏は「ノロ神の変身」（徳富 一九八二）に同様の神名を祝詞とともに紹介し、「アマミヤコセジッキョウ」と表記しておられることから、そのように発音するものと推測される。

5　この場合、久米島や伊是名島の用例では「天 の みや／あめ の みや」とあって、「あま の みや」とは出てこない。しかし、「天 の みや／あめ の みや」というように「あめ」は「天」と対語になっていることから、「あめ」は「天」の意味の「あめ・あま」であることが分かる。ただし、久米島・伊是名島で「あめ」、徳之島で「あま」というように、なぜ表現の違いが現れるのかについては分からない。

6　『徳之島尾母方言集』（徳富 一九七五）によると、尾母では、ｅ音からｉ音への変化が不完全であることがうかがえる。語頭のｅは、海老＝イビのようにｉへ変化している例もあるが、銭金＝ゼンカネのように変化していない例もある。語中・語尾のｅ音は、汗＝アセィ、雨＝アメィ、風＝カデ、牡牛＝クテ、酒盛り＝サケィムイ、孵化＝シデリィ、田舟（豚等の餌箱）＝トーネとなっており、語中・語尾においてもｅ音からｉ音への変化は不完全であることが分かる。

7　「こしらへ」がまず狭母音化して「くしらい」となり、「知られ」が「sjare」（長田ほか 1980: p913）となるように、「し」が「ら」のａ母音の影響をうけて「くされ」となった変化が考えられる。

2　説話にみる神名

1．事例と総数

『日本の伝説23奄美の伝説』（島尾ほか 1977）、『瀬戸内町の昔話』（登山修［編］1983）、『徳之島の昔話』（福田晃［編］1984）、『大和村の昔話』（山下欣一ほか［編］1986）などを対象として神名を調査した[1]。神名と考えられる事例が、総数38例認められた。以下に五十音順に列挙する。ただし、この神名の数は暫定的なもので、神名ではないと考えられる事例がでてくる可能性があり、逆に神名と考えていない未詳語が神名と解釈される可能性もあることは上述の『奄美篇』の場合と同様である。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

アガレンハルカナ
イニャダマぬ神
雨気岳（アミキ）の神
イワトシ神
イワムトゥヌ神
インマホ
恵比須様（エビスサマ）
カネサン
カンチバナアサチンギャナシ
キンパチキンオ
十三夜（ジュウサンヤ）の神
定規持ち加那志
水神様（スイジンサマ）
スズガム
セクガミ
高千穂様（タカチホサマ）
ティンツィルボぬ神
天狗（テンゴ）の神
テンゴの神
ナルコぬ神様
二三夜（ニジュウサンヤ）ぬ神
ネィッリャぬ神
ネゴホヌカミ
ビジディン
ヒニャハムガナシ
福神様（フクジンサマ）
フドン
フナダマサマ
ミスデガミ
ミャンカム
ムチョリボ
屋敷神（ヤシキガミ）
山ガナシ
山ん神
ヤンマボ
ユワタシ神
龍宮・ティルコぬ神様加那志
脇ぬフクヌカミ
（全38例）

2．神名の分析

「1　神歌にみる神名」と同様、方言語形あるいは類推表記の事例について、分類・分析作業を以下に行っていく。

①定規持ち加那志

この神名は読んで字の如く「定規持ち」という名に、接尾敬称辞「加那志」が付いた形とみていいだろう。この神名には「定規」という漢語が含まれており、比較的新しい神名と考えられる[2]。

それではこの神格自体も新しい存在なのであろうか。「定規持ち加那志」はどのような神格であるのか、本神名の登場する瀬戸内町武名に伝承され

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

ていた「大工神の話」(登山ほか 1983 p22～24) の、訳文の一部を以下に引用してみる。

「私達が、幼かったころには、定規持ち神という、五尺位の、いわば槍のような棒を持って、先と後へは尖りの出ている、そんな帽子をかぶっている神様が出てきたものでした[3]。(ノロ祭りの) 神軒 (アシャグェ) を造るときには、葺き替えの時にではなく、村の人がみんな出て、隅の柱から間の柱まで、みんな替えるとき、柱を全部替えるときには、定規持ち加那志という、大工 (セク) の神様が、背の高い神様が一人降りて来て、人目についた。(中略) 男の神様でした。庭のシマタゴの木の高さくらいの、とても背の高い神様でした。

家の四隅の柱や、中柱などが、真っ直ぐしているときには、その五尺くらいの棒はどこにもつけないで、何回もぐるっと振り回して、また山の方へ登っていくものでしたよ。(中略) 曲がっている柱は、パチパチ振っている棒で打てば、どんなわけかしらないけれど、その神様が見れば、気に入らないのだろうか、その翌日、老人たちが、気をつけてみると、本当に曲がっている柱だったそうです。」

このほか、加計呂麻にも「ジョウギムチ」という同様の神がいて、建物などの築造の際以外に、造船の際にもあらわれたとされる (松原 2004 p75)。まとめると、「定規持ち加那志・神」あるいは「ジョウギムチ」という神格は祭祀に関する建物や舟を築造した後、五尺ほどの棒を持って現れる。そして築造物の出来具合を確かめる役目を担っている。この役目については本文中「定規持ち加那志」を「大工 (セク) の神」と呼んでいることからもイメージし易い。

実は建物を築造した際や造船の際に棒を持って現れる神は、現在も存在しているのかは分からないが、かつて沖縄本島の北部にも存在していた。「家、船の落成した時、山原(国頭郡のこと)では神々を招じて此を祭る(中略) 神々の帰つた後、屋敷内を捜すと神の杖ダシキヤ (木名) 御杖の跡が歴々と見られる」(島袋 1929 p261) という記録から分かる。また、この山原の神も「定規持ち加那志」と同じく、築造物の出来具合を確かめる役目を負っていた。以下に引用する。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

「三十年程前迄は、大宜味村塩屋に於ては、帆船を新造して、明日が進水式だといふ夜半に、必ず氏神の森から神鉦を鳴らしつゝ数多の神々が現れ来つて、船を巡りつゝ釘の打ち方の拙い所には、神杖をもつて標をつけ置くものだと信じられている（島袋 1929 p137)」

このような記録を見ると、奄美の「定規持ち加那志・神」と同じ役目を担っている神格であることが分かる。しかし、山原における神名を調べてみると、「定規持ち」あるいは「定規」などという名称はみえない。これは、「定規持ち加那志」の事例は、神名自体は比較的新しいが、神格としては広く存在している事例であることがうかがえる。また、このことから、神名は変化する場合もあることが分かる。

【注】

1　本稿では、説話とは昔話・伝説・世間話などを含んだ広い意味で用いている。

2　和語ではモノサシ（物差・物指）と呼称される。

3　「定規持ち加那志」の衣裳は、帽子もついており、非常に珍しいものとなっている。このような衣裳は沖縄本島の祭祀儀礼における祭具には見られない（安江 2002 p14参照)。この事例から、「定規持ち加那志」は非常に珍しい風体の神格であることが分かる。

3　その他の記録にみる神名

1．事例と総数

各市町村史および『奄美 加計呂麻島のノロ祭祀』(松原武実 2004 岩田書院)、『南西諸島の神観念』（住谷・クライナー1977 未来社）などの論文等を対象として神名を調査した。全体としては神名と考えられる事例が、23例認められた。以下に五十音順に列挙する。ただし、この神名の数は暫定的なものであることは上述の『奄美篇』、説話の場合と同様である。

<u>奄美諸島</u>

アヤナギャ　　ウフスデ

ウッカム　　エヘノメズラシガナシ

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

カネノジャメキ
ジョウギモチ神
ダイテンゴ
タカガミサマ
ティノカミサマ
テコヌクシャレ
テヘノマシジ
テルコガミ
ナリワシ
ハシカノ神
ハベラ神
マシラベ
ミチバレ
ヤマノカミ
ヤマノクンジャネ
雲のますらべ親祝女大祝女
大ヒゲアラヒゲ
茶泊チヤンヌルガナシ
長崎大ヒゲアラヒゲ
（全23例）

2．神名の分析

1、2節と同様、方言語形あるいは類推表記の事例について、分類・分析作業を以下に行っていく。

①ましらべ

神名「ましらべ」の文献における初見は『琉球国由来記』（以下『由来記』）である。巻20宮古島の「嶽々由来」の項に「2　広瀬御嶽（中略）女神。真シラベト唱ウ。為船路崇敬スルナリ」と出てくる。また、巻21「八重山島嶽嶽名并同由来」には「13　コルセ御嶽　神名　大コルサ　御イベ名　月ノマシラヘ」とみえる。「マシラヘ」と末尾の「へ」が濁音化していないが、同種の神名と考えられる[1]。『由来記』およびその他の事例から、見出しは「ましらべ」とした。

今回の調査で拾い上げた神名の中で「ましらべ」という語を含んでいると考えられる事例には、「マシラベ（加計呂麻島瀬戸内町薩川）」[2]および「雲のますらべ親祝女大祝女（奄美大島名瀬市芦花部）」[3]がある。「ましらべ」は沖縄諸島にはみられない神名であるが、奄美、宮古および八重山地域の神名としてあることから、分布範囲は広い[4]。

②おほ-そで【大袖】

本神名はオモロや『南島歌謡大成』などにはみられない。見出しは加計呂麻島瀬戸内町須子茂における神名「ウフスデ」（住谷・クライナー 1977

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

p84)の事例についてuhusudïを考え、*ohosode＞uhusudïの語形変化をたどったと想定して「おほ-そで」とした。

「そで（袖)」という語を含む神（女）名としては、オモロ巻13－93(838)「なよかさは　てとりぢやうず／そできよらは　ゆうとりぢやうず（なよ笠神女は舵取り上手である／袖清ら神女は潮水取りが上手である)」(外間2000b p56）や、『由来記』巻21に八重山の崎枝村崎枝御嶽のイベ名として「袖タレ大アルジ」など、広い地域に散見できる。神（女）名になぜ「そできよら」「袖タレ」など、「袖」という語が含まれるのかについて波照間永吉氏は「神および神の憑依体に『袖を垂れる』状態が幻視・期待されるのは、この状態が神の姿として理想的な状態であったからではなかろうか」(波照間 1999 p993）と指摘している。「ウフスデ」もそのような祭具としての袖の性質が神名に反映されている事例と考えられる。また、本神名は衣裳名としても用いられている[5]。

「ウフスデ」は、祭具としての「袖」の発想を含んだ、奄美独特の神名と考えられる。

【注】

1　『由来記』には濁音であるはずの音を清音で表記している事例がままある。例えば巻５「御城中御日・御月・火神・御嶽之事」には「11　寄内ノ御嶽　神名　ミヤガモリノ御イへ」とあり、末尾が「イベ」となるはずが「イへ」となっている。ここでもこのような事例の一つと考えうる。

2　eからïへの変化は、奄美地域に広くみられる。『南島歌謡大成Ⅴ奄美篇』には同様の神名を「ましらぶぇ」(外間・田畑・亀井 1979 p45）と表記した事例もみえる。薩川の「マシラベ」については、恐らくmaʃirabïのbïを「ベ」と表記したと考えられ、ほぼ発音通りの表記であることがうかがえる。

3　「ますらべ」であるが、奄美では例えば、まっすぐ（真直ぐ）を「マッシグ　maQsigu」(菊・高橋 2005 p534）などと、「す」をsiと発音する事例があり、そのような事例に影響を受けた類推表記と思われる。ただし、升目を「masïmï」、真四角を「masixaku」と発音するなど（長田

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

ほか 1980b p680)、「す」と「し」とを発音し分けている地域もあり（ウェイン・ローレンス氏のご教示による)、名瀬市芦花部における「す」、「し」の発音について今後調査の必要がある。

4　松原武実氏は「ましらべ」を「真白南風」（松原 2004 p48）と分析している。

5　奄美の神女が所有している神衣裳で上半身に着るものとしては胴衣（どぎん）と大袖衣（おおそでぎん）などがあるが、実際の衣裳をみると、胴衣に較べて大袖衣は文字通り明らかに袖が大きいことが分かる（下野 2005 p86参照)。

4　小括

神歌、説話、その他の文献記録にみられる神名の中から、特に興味深い事例について分析・分類作業を行ってきた。

神歌にみる神名では、「あまのみやのこしらえきょう」「てぇぬくされ」について考察を加え、神名の前要素に場所名がくる傾向があることを確認した。これは、神の在所や出自を考える上で参考になる要素である。ただしこの傾向は、奄美地域以外の神歌やオモロなどにおしなべてあるものではない。オモロ巻10－30(540)には、「一　たいら こしらへ や／又　もり の こしらい や（平良こしらへは／杜のこしらいは)」という詞章があり、神名の前要素として地名「たいら（平良)」があがっているが[1]、巻21－68(1461)「又　こしらゑ す　にせたれ／又 かみにしや す　にせたれ(こしらゑ神、かみにしゃ神こそがふさわしいのだ)」などのように、単独で用いられている事例もある[2]。このような傾向の相違をどうみるのか。地域的な特徴という視点に加え、音数律や歌形に関する視点も持ちながら考えていくことが必要であろう。

また「あまのみやのこしらえきょう」「てぇぬくされ」について、双方とも「こしらへ」を含む神名であることを分析、分類した。「こしらへ」は『おもろさうし』に「こしらへ」「こしらゑ」「こしらい」、『南島歌謡大成 Ⅲ 宮古篇』に「ふしらイ」「ふしらズ」、『琉球国由来記』に「フセライ」などの語形で見え、奄美、沖縄、宮古という広い範囲に分布する神名であることが分か

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

る。「こしらへ」同様、広く分布している神名に「あおりやへ」「さすかさ」「なよくら」「みぜりこ」などがある。このような、広い範囲にわたって分布する神名について、奄美・沖縄・宮古・八重山それぞれの地域における上記神名の分布範囲および各地域における分布を確認し、今後、比較・検討を行っていきたい。また、神名の核となる「こしらへ」、「あおりやへ」「さすかさ」「なよくら」「みぜりこ」などの要素について、更に詳細な語義分析を試みたい。

説話にみる神名では、「定規持ち加那志」について沖縄本島北部の造船関連の逸話に登場する神と比較し、それらの神が行う造船の際の儀礼や役割が類似していることを認め、同種の役割を持った神格でも、神名自体は地域によって異なる事例があるということを確認することができた。奄美では「定規持ち神」の他に「セクガミ」「ハシカノ神」など、その能力・役割を表した名をもつ神がみえるが、例えば『由来記』収載の説話に登場する神やその神名をみてみると、神名にその神の役割等が反映されているとは言い難い事例も多くある[3]。今後このような神の持つ能力・役割と神名の関係について、地域的な傾向や、時代的な傾向も考え合わせながら論じていきたい。

その他の記録にみる神名としては、ウフスデを扱った。そして、袖の大きな衣裳について、単なる衣服としてではなく、オモロに登場する「そできよら」などの神名と同様に、祭具としての大袖衣裳を着た神（女）の理想の姿が、神名に反映した可能性を示した。この事例のように、神名から神の形象が分かる事例については他に「大ヒゲアラヒゲ」「ティンツィルボぬ神」「ハベラ神」「ミスデガミ」などの事例と併せて、神々の姿形という視点から考察していく予定である。

以上、本稿における考察をまとめてみた。上記の考察結果についてはまた、日本本土との比較の視点からも捉え直すことができる。例えば「神名の核」ということについては、日本本土における神名の核とされる「ヒ」「チ」「タマ」などの要素[4]との比較、あるいは「神の持つ能力・役割と神名の関係」については、日本神話における「蜇貝比売（きさがひひめ）」と「蛤貝比売（うむがひひめ）」[5]などの神名と比較・検討を行うことで、「核」として選ばれ易い語彙や、神名とその役割の関連性というものに、傾向や地域性等がみえることが予想される。やはり南島地域における神名という視点だけではな

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

く、日本本土の神名についての視点ももちながら、問題にあたっていくべきであろう。

以上、神歌、説話そしてその他の記録にみえる神名について、分析・分類結果をまとめ、問題を提起した。今後、これらを研究課題の一つとして据え、研究を進めていきたい。

【注】

1　岩波文庫『おもろさうし』では、平良は「首里の平良」（外間 2000a：p360）とされる。

2　外間 2000b：p388

3　例えば『由来記』巻20－12には、「山立御嶽　女神。オタハルト唱」とあり、宮古友利村の「オタハル」という女性が死後、神として祀られ「船路、且、諸願ニ付」祈願の対象となったという説話が記載されている。ここでの神名「オタハル」はもともと人間として持っていた名称で、その能力・役割とは関連していない。

4　土橋 1990:135～164

5　「ここに蜃貝比売きさげ集めて、蛤貝比売待ち受けて、母の乳汁と塗りしかば（赤貝の汁をしぼって蛤の貝に受け入れて母の乳汁として塗った。古代の火傷の療法である）」（武田祐吉 1977:44）と、蜃貝比売（きさがひひめ）は、貝としての形象より、薬としての機能に注目した神名となっている。

謝辞

本稿の執筆にあたり、波照間永吉先生（沖縄県立芸術大教授）、田場由美雄氏、西岡敏氏（沖縄国際大教授）に多大なるご指導をいただいた。また、清村まり子氏および波照間ゼミの学生の皆さんとは、ゼミ会などで意見交換をさせていただき考察をより深めることができた。特に記して感謝申し上げる。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

引用・参考文献

池宮正治・玉城政美 1970『『琉球国由来記』所出神名索引』私家版
居駒永幸 2003『古代の歌と叙事文芸史』笠間書院
稲村賢敷 1968『沖縄の古代村落マキョの研究』琉球文教図書
伊波普猷1 1974『伊波普猷全集 第1巻』平凡社
伊波普猷2 1974『伊波普猷全集 第2巻』平凡社
伊波普猷3 1974『伊波普猷全集 第3巻』平凡社
伊波普猷4 1974『伊波普猷全集 第4巻』平凡社
伊波普猷5 1974『伊波普猷全集 第5巻』平凡社
伊波普猷6 1975『伊波普猷全集 第6巻』平凡社
伊波普猷7 1975『伊波普猷全集 第7巻』平凡社
伊波普猷8 1975『伊波普猷全集 第8巻』平凡社
伊波普猷9 1975『伊波普猷全集 第9巻』平凡社
伊波普猷10 1976『伊波普猷全集 第10巻』平凡社
伊波普猷11 1976『伊波普猷全集 第11巻』平凡社
浦添市立図書館編 2003『浦添市立図書館紀要 第14号』浦添市立図書館
沖縄古語大辞典編集委員会［編］1995『沖縄古語大辞典』角川書店
沖縄大百科事典刊行事務局［編］1983『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社
長田須磨・須山名保子・藤井美佐子 1980a『奄美方言分類辞典 上』笠間書院
長田須磨・須山名保子・藤井美佐子 1980b『奄美方言分類辞典 下』笠間書院
小野重朗 1982『奄美民俗文化の研究』法政大学出版局
狩俣恵一 1999『南島歌謡の研究』瑞木書房
菊 千代・高橋俊三 2005『与論方言辞典』武蔵野書院
倉野憲司『論集 古事記の成立』1977 大和書房
神野志隆光 1999『古事記と日本書紀』講談社
子安宣邦 2005『本居宣長とは誰か』平凡社
西郷信綱 2005『古事記註釈 第1巻』ちくま学芸文庫
坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注 1967『日本古典文学大系 日本書紀 上』岩波書店
島尾敏雄・島尾ミホ・田畑英勝 1977『日本の伝説23奄美の伝説』角川書店

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

島袋源七 1929『山原の土俗』沖縄郷土文化研究会
下野敏見 1994『トカラ列島民俗誌』第一書房
下野敏見 2005『奄美・トカラの伝統文化』南方新社
新里幸昭 2005『宮古歌謡の研究』沖縄自分史センター
住谷一彦・クライナーヨーゼフ 1977『南西諸島の神観念』未来社
谷川健一［編］2000『日本の神々—神社と聖地　第13巻 南西諸島』白水社
田畑英勝 1976『奄美の民俗』法政大学出版局
遠山美都男［編］2004『日本書紀の読み方』講談社現代新書
徳富重成［編］1975『徳之島尾母方言集』私家版
徳富重成 1982「ノロ神の変身」『南島—その歴史と文化—４』（南島史学会［編］　第一書房）収載
登山修［編］1983『瀬戸内町の昔話』同朋舎出版
鳥越憲三郎 1965『琉球宗教史の研究』角川書店
仲間井左六［編］1975『宮古お嶽集』私家版
西川順土 1977「古事記の神——古事記成立の側面——」（倉野憲司『論集 古事記の成立』1977 大和書房 収載）
日本大辞典刊行会［編］1974『日本国語大辞典〔縮刷版〕第６巻』小学館
波照間永吉 1999『南島祭祀歌謡の研究』砂子屋書房
波照間永吉 2002「沖縄の神々の象徴－説話の神と祭祀・芸能の神－」（宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所『研究年報 35』2002 収載）
平良市史編さん委員会 1994『平良市史　第９巻　資料編７（御嶽編）』平良市教育委員会
外間守善校注 2000ａ『おもろさうし 上』岩波書店
外間守善校注 2000ｂ『おもろさうし 下』岩波書店
外間守善・玉城政美編著 1977『南島歌謡大成Ⅰ沖縄篇上』角川書店
外間守善・新里幸昭編著 1978『南島歌謡大成Ⅲ宮古編』角川書店
外間守善・宮良安彦編著 1979『南島歌謡大成Ⅳ八重山篇』角川書店
外間守善・田畑英勝・亀井勝信編著 1979『南島歌謡大成Ⅴ奄美篇』角川書店
外間守善・波照間永吉 1997『定本　琉球国由来記』角川書店
福田晃［編］1984『徳之島の昔話』同朋舎出版

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

前田長英［編］1982『徳之島郷土研究会会報第９号』徳之島郷土研究会
松原武実 2004『奄美 加計呂麻島のノロ祭祀』岩田書院
安江孝司 2002『沖縄文化研究28』法政大学沖縄文化研究所
山下欣一ほか［編］1986『大和村の昔話』同朋舎出版

NII-Electronic Library Service